

**3月4日ゼミは開催します****巨大前方後円墳の被葬者：大王とその妻たちなど**

—3月4日ゼミ紹介文—永井 輝雄会員記

## 1. 前方後円墳体制

北条芳隆氏などは、前方後円墳を構成する墳墓要素、すなわち①外槨(墳丘、段築、葺石)、②内部主体(竪穴式石槨、割竹形木棺など)、③副葬品(ベンガラ、銅鏡、玉、石製品、武器、武具)、④外表施設(白色円礫、円筒埴輪、壺形埴輪)、⑤葬送儀礼が、北部九州、吉備、出雲、その他東海、丹後、東瀬戸内などの地域を起源としており、大和起源のものはほとんどないことを根拠にして、古墳時代開始時期における大和の優越性を否定して、各地域の首長達が協調して主導したとみる諸地域主導(協調)説を唱えた。

この説に関して私は、素人ながら、次のように考えた。古墳時代開始時期に造られた巨大前方後円墳は、各地域の特色ある墳墓様式と葬送儀礼を総合してまとめたものであることは間違いない。しかし、それは、北條氏がいわれるように、北部九州・山陰・瀬戸内中部北岸と東部両岸の諸地域の勢力が、合意と付託にもとづいて特定の人物を選定し、その者の下で、巨大前方後円墳の築造にかかわる業務(大規模公共事業)が行われたのだろうか。

弥生時代において、唐古・鍵遺跡やその周辺集落がある場所、すなわち初瀬川や寺川の上流部や下流部にあたる場所は、弥生時代前期から後期まで、奈良盆地において最も生産力の高い場所であった。この地域は、考古学者の坂靖氏によって「おおやまと」地域と名付けられたが、「おおやまと」地域は、庄内式期から布留式期にかけては、弥生時代以来の豊かな生産基盤を継承し、これまでより高い生産を行うため、外部からの移住者を迎え、新たな開発を進捗させた地域であった。古墳寒冷期において人々が住んでいた村を捨てて、

唐古・鍵遺跡や纏向遺跡などに集まったのは、そこへ行けば米と塩を支給され、土地を開墾したりお墓を築く仕事にありつけたからだ。各地からの移住民を労働力として使い、巨大な前方後円墳を造れるだけの経済力(余剰の米)が「おおやまと」地域に蓄積されていたと考えられる。そして大勢の人々の労働力は武力に転じる可能性を持ち、「おおやまと」地域の首長の地位を高める。さらに、「おおやまと」地域に来た人々は、それぞれの出身地に関する情報も提供したはずである。「おおやまと」地域の首長は、司祭者ヤマトトヒモソヒメを葬るときに、(ツクシ)、イズモ、キビ、タニワなどから持ち込まれた情報を使って、纏向の地に、新しい巨大前方後円墳を企画・築造し、葬送儀礼を定め、その上で各地の首長達に提案をし、前方後円墳体制の承認を求めたのではないかと思う。

## 2. ヤマト王権の始まり

箸墓古墳(最初の巨大前方後円墳)の被葬者は、ヤマト王権最初の王(天皇)ではない。箸墓古墳築造から30年ほどたってからヤマト王権が成立し、崇神陵が築造されたと考えられる。

『日本書紀』崇神紀10年9月条に、大物主神の妻となった倭迹迹日百襲姫命が死亡し、箸墓に葬られたことが書かれている。ヤマトトヒモソヒメが実在の人物かどうか疑問を持つ人がいたとしても、巨大前方後円墳(箸墓)が先にできて、その後各地に前方後円墳が築造され、それから実質的な初代天皇である崇神(はつくにしらすスメラミコト)が即位してヤマト王権が始まったという骨格は動かないと思う。

## 3. 巨大前方後円墳の被葬者を、『記紀』と古墳編年表から探す

近畿地方の大型古墳を地域別・年代別に記した編年表がある。

川西宏幸氏は、昭和48年(1973)以降、長足に進捗した円筒埴輪の編年研究に着目した。近畿の大型古墳は王や有力者の墓だと推定されるが、多くは天皇皇后

たちの墓とされ発掘は許可されていない。そういう状況の中で、規制がかかっている場所の外側でも円筒埴輪は発掘されており、資料の入手が容易であるため円筒埴輪の編年研究は続けられ、その成果が一定程度出そろったことにより、時間と空間をまたいで統一した指標による古墳編年は可能となった(『古墳時代政治史序説』1988)。

甘粕健氏は、円筒埴輪と須恵器の編年を対応させて、近畿地方の古墳の時期区分を試みた。そして、1小期30年、10期の終りを580年として実年代を割り付けた。その結果1期の始まりは280年となった。(『季刊考古学58号』1997)

坂靖氏は、川西氏の研究以降、円筒埴輪の形態とか製作技法に関する考古学研究者の研究成果を基に、『円筒埴輪から見た古墳の編年』を発表した。(『古墳時代の遺跡学』2009)

私は、近畿地方に点在する巨大古墳の被葬者が分かれば古代史はもっと面白くなるのではないかと思って、このテーマを取り上げた。箸墓古墳から太子西山古墳(敏達天皇陵)まで50の前方後円墳、52人の被葬者を検討したことになる。そのうち、4世紀末から5世紀前半にかけての馬見古墳群とその周辺に存在する宝来山、巢山、島の山、新木山の4古墳については、古墳という現物は残っていても、古墳にまつわる伝承が破棄されているようで、名前を推定する手掛かりがない。以上

## ゼミ会場と時間 13:15~16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR(東口)・都営三田線(A1)下車徒歩1~2分

## 楠木正成とは何者だったのか

—かつての忠臣をどう評価するか—

清野敬三会員記

### ◇はじめに

第2次大戦敗戦の日を境に、楠木正成ほど評価の激変した人物はいない。戦前は忠臣「大楠公」と称され「日本人の鑑」と讃えられていたが、戦後は悪党と呼ばれ蔑まれ、歴史の教科書にも殆ど登場しない。さらには、正成を語ること自体、「極右」のレッテルを貼られかねない雰囲気さえある。

しかし、正成が国家主義イデオロギーの道具となったのは、それを利用した側の問題であり、本人の罪ではない。時代的一端を担った人物として、その実像や歴史的役割を再確認してみたい。

### ◇正成の出自◇

楠木正成の出自については、千早赤坂村の辺りに本拠を置く土豪であったと云う他、戦前から多くの学者が手を尽くして調べたが、よく分からないというのが実情である。

従来、前歴について、ほぼ確実な文献としては次の2件しかないと言われていた。一つは、「筒井寛聖氏所蔵文書」で、永仁3年(1295)播磨国大部荘の百姓が東大寺に提出した訴状に、河内楠入道らが荘内で非法行為をはたらいたとの記述があり、その楠入道が正成の父祖か一族と考えられている。二つ目は、「天龍寺文書」で、正慶元年(1332)頃、和泉国若松荘へ悪党楠木兵衛尉なるものが押し入って乱妨をした風聞があったとし、その悪党楠木兵衛尉が正成に相違ないとされる。なお、当時の「悪党」という言葉は、悪者という単純な意味ではなく、経済力と武力を背景に旧勢力である荘園領主等に反抗する武士や荘民を指す言葉で、アウトロー集団を意味する。

これらの僅かな情報をもとに、正成の素性について多くの説が出されている。主なものとして、中村直勝氏は赤坂地方の水銀の原鉱である辰砂を採掘し朱の原料として売り捌いていた商人的武士とする。林屋辰三郎氏は散所の長者的武士だろうとする。散所とは一種の賤民で、荘園領主の雑役に奉仕し、その散所の統率を領主から任されて富を築いたのが散所の長者である。(佐藤進一『南北朝の動乱』中公文庫)

比較的新しい説としては、駿河国出身の北条得宗被官説がある。中世の武士は、本拠を置いた土地の名前を名乗るのが一般的であるが、河内国や周辺には楠木の地名はなく、他所から移住して来たと考えられる。一方、鎌倉幕府が正応6年(1293)駿河国の入江荘内の長崎郷の一部と楠木村を鶴岡八幡宮に寄進したとの「八幡宮文書」があり、楠木村の北条得宗被官である楠木氏が移住してきたのではないかとする。(新井孝重『楠木正成』吉川弘文館)

正成が得宗被官であったとすると、旧主北条を裏切って後醍醐に接近したことになるが、この点は足利尊氏や新田義貞と何ら変わらない。僕はこの得宗被官説に賛意を表すが、同時に「悪党」として反権力者活動も行い、また辰砂の商売も行う多面性を持った武士だったと考える。

### ◇正成の反幕府の戦い◇

正中元年(1324)、後醍醐天皇は鎌倉幕府打倒を計画したが、未然に発覚し失敗した(正中の変)。後醍醐は

これに懲りることなく、その後も倒幕活動に執念を燃やし続け、元弘元年(1331)再度の計画も重臣吉田定房の密告で露見した。後醍醐は六波羅の追求に笠置山に逃げ、そこで挙兵したが捕らえられ、翌年隠岐に流された(元弘の乱)。

正成は、後醍醐の挙兵に応じ河内赤坂城で蜂起した。寡兵ながら奇襲作戦により幕府軍を悩ませたが、赤坂城は急造の城で長期戦は不可能であり、正成は自ら城に火を放ち、姿をくらませた。

後醍醐の皇子大塔の宮護良親王は、幕府の手を逃れゲリラ戦を続け、正成も金剛山の千早城に兵を挙げ、落石攻撃や火計などを駆使した変幻自在の戦術で幕府の大軍と対峙した。

元弘 3 年(1333)、後醍醐は隠岐を脱出し、名和長年に迎えられ船上山に蜂起した。このような情勢から各地に倒幕の機運が広がった。反乱鎮圧のために上京した足利尊氏も、突如、後醍醐側に寝返り六波羅探題を攻め滅ぼし、正成の千早城を包囲していた幕府軍も撤退した。

#### ◇建武の新政◇

元弘 3 年(1333)5 月、新田義貞が鎌倉の北条氏を討ち、鎌倉幕府は滅亡した。後醍醐天皇が京都に還り、建武の新政が始まった。新政は天皇親政を標榜して武家政治を否定し、綸旨万能で旧慣を無視した。武士階級の抵抗だけでなく、公家階級の既存勢力からも不満が出た。裁判も万事天皇の直接裁決のため事務は停滞した。建武新政は、後醍醐の意気込みにも拘わらず多くの政策が行き詰まり失敗に終わる。

この新政権で、正成は従五位下、摂津・河内国司に補され、恩賞方・記録所寄人・雑所決断所奉行人・檢非違使などの主要役職についた。後醍醐の信任が厚く、結城親光・名和長年・千草忠顕とあわせて「三木一草」と併称された。しかし、一介の武人であり、政治上の実務には不慣れであった。「二条河原落書」でも「キツケヌ冠、上ノキヌ、持モナラハヌ<sup>もつ</sup>持テ、内裏マジハリ珍シヤ」と揶揄された。

建武 2 年(1335)7 月、北条高時の子時行が、北条氏の再興を図り信濃で挙兵し、鎌倉を占拠した(中先代の乱)。足利尊氏は、勅許が無いまま東下し鎌倉を奪回した。後醍醐との対立が顕在化し、尊氏は上洛の勅命を拒否し、建武政権と決別した。新田義貞が尊氏追討に向かったが箱根竹ノ下で敗れ、尊氏は京都に迫った。建武 3 年(1336)2 月、正成は、義貞や北畠顕家らと合流し尊氏を京都から追い、西宮打出浜で破り九州に敗走

させた。

#### ◇正成、尊氏との和睦を上奏◇

尊氏の敗走を聞き廷臣が歓呼の声をあげる中、逆に尊氏と和睦をするようにという驚くべき提案を、正成が上奏した(『梅松論』下『群書類従』第 20 輯)。「時に正成奏聞して云。義貞を誅伐せられて尊氏卿を召かへされて、君臣和睦候へかし。御使にをいては正成仕らむと申上たりければ、不思議の事を申たりとてさまざま嘲哂ども有りける。」義貞を誅伐して、尊氏と和睦なさって下さい。その使者にはこの正成が仕りますと正成が云ったのに対し、廷臣たちは、正成が訳の分からないことを云ったと驚いてしまい、嘲り嗤ったと云う。

しかし、正成は本気である。続けて云った。「帝が幕府を倒せたのは尊氏のお蔭です。義貞が関東を落とすとはいえ、天下の侍たちは皆尊氏に従いました。その証拠には、今回の敗軍の武士はもとより、帝に味方した武士さえ、勝った帝を見限り尊氏の九州下向に付いて行ってしまいました。これを見て、帝の徳の無さを思い知ってください(爰を以て徳のなき御事知しめさるべし)。」

「人望を失った後醍醐に徳が無い」と、その通り云ったかどうかはともかく、正成の本心であったろう。正成は、ただ天皇に盲目的に忠誠を誓うだけの人物ではなかった。『梅松論』は足利方の記録であるが、正成の本音は尊氏に傾いていたとみるべきで、この上奏の説話を僕は重視したい。

#### ◇湊川の戦と正成の死◇

建武 3 年(1336)3 月、尊氏は九州の多々良浜の戦いで菊池武敏らの勢力を破り、態勢を立て直して京都奪回を目指し東進を始めた。尊氏軍には、途中各地の武士が集まり付き従い、中国・四国の有力武将の勢力も併せて大勢力となった。一方、京都政権軍の総帥新田義貞は、赤松円心の播磨国白旗城攻略に手間取り時間を空費し、しかも日毎に兵力も減少し、兵庫まで後退せざるを得ない状態になっていた。

この時、正成は京都から撤退して軍事対決を避ける作戦を上奏した。尊氏軍を一旦京都に引き入れた後、糧道を断ち敵の体力を弱める作戦である。しかし、天皇側近の坊門清忠が、天皇の度々の動座は帝位を軽んずるものだとして一蹴してしまう。さらに清忠は云う。「今まで官軍は小勢であっても敗れたことはなかった。これは正成の武略が勝っていたからではない。ただ聖運が天意にかなっていたからだ。敵を斧鉞のもとに撃滅することに何の困難があろうか。直ちに楠木は摂津へ下向

せよ。」要するに、正成のこれまで尽くしてきた働きは全否定されて、捨て駒にされたわけである。

正成の気持ちを『太平記』(島津家本)は次のように書いている。「此の上は異議を申すに及はず、さては大敵を随へ、勝軍を全ふせんと、智謀叡慮にてはなく、只忒心なきの戦士を、大軍に当られんと計の仰なれば、討死せよとの勅定こさんなれ。」これは「討死せよ」との天皇の命令であると正成は受け取り、引き下がるほかはなかった。後醍醐から裏切られたという絶望感であろう。

同年5月、新田・楠木連合軍と尊氏軍は兵庫湊川で激突した。新田軍は主力を率いて和田岬辺に布陣し、楠木軍は播磨街道を見下ろす会下山にいた。戦機が動くと新田軍は海上の尊氏軍の陽動作戦につられて東へ移動し、楠木軍との間が分断された。楠木軍は大軍の中に孤立し、壮絶な戦闘で兵の数は減り、正成は弟正季と刺し違えて自害した。新田軍は楠木軍を置き去りにして京都を目指し敗走し、後醍醐は叡山に逃げ込み建武政権は崩壊した。

#### ◇まとめ◇

正成の生涯をみると、鎌倉幕府滅亡前は庶民の力を味方として反荘園領主のリーダーとして戦い、或いは赤坂城や千早城で奇抜な戦術を駆使して幕府軍を悩ませ、倒幕勢力の蜂起を促す役割を果たすなど存分な活躍をした。まさに「悪党」の面目躍如たるものがあつた。

しかし建武新政後は、旧慣を否定する後醍醐の方針から政府の役職に重用されたが、逆に民衆の基盤を失ってしまった。しかも最後は、後醍醐政府からは使い捨ての駒扱いされ死地に赴くことになった。

正成にとって、戦いに敗れたら「逃げる」という選択肢もあつたらう。司馬遼太郎は「逃げればいいんですよ」と、あつさり云っている(『日本史探訪』角川文庫)。この南北朝の時代、公家も武士も社会全体が功利社会であつた。すべてが利害関係で動いており、主従の関係も損得によって成り立っていた。一般の卑しき民には天皇への忠義という考えはなかつた。

正成がここで「逃げる」ことをせずに「死」を選んだのは何故か。民衆的基盤を失い、武家社会からも離反した上、後醍醐にも裏切られた絶望感があつた。この時代には稀有な彼独自の美意識により、死地に赴かざるを得なくなったのだろう。それだけに悲劇の武将として人々の記憶に残つたと云えよう。以上

### 文化財発掘出土情報(2023年1月・2月号)

— 齊藤 潔 会員記 —

< 宇曹一蝦夷が胆沢城の正門を守る >

2022年10月、岩手県奥州市埋蔵文化財調査センターが、1976年に胆沢城(802年築造)跡から出土した硯から、墨書を発見したと発表した。出土当時は墨痕が薄く判読不明だったが、今回の整理・調査で、風字硯の2カ所に「宇曹」という字を確認した。「宇」は蝦夷の豪族「宇漢米公(うかめのきみ)」氏、「曹」は詰所を意味する「曹司(ぞうし)」のことで、「宇曹」は宇漢米公氏が詰める曹司と説明。硯は、胆沢城の正面入口である外郭南門前方の外溝から出土したが、そのすぐ近くに掘立柱建物があり、「宇曹」と比定でき、「宇曹」は門の守衛や管理を担っていたと推測できる。この事から、朝廷が帰順した蝦夷を懐柔して、正門の守衛や人の出入りを管理させる「夷を以て夷を制する」政策の採用が推定される。

< 飛鳥宮跡(7世紀代) — 樫原考古学研究所 >

飛鳥時代の宮跡遺跡はこれまでの調査・研究から、3時期の宮殿遺構が重複している事が判明している。即ち、3時期とは、I期(舒明天皇の飛鳥岡本宮 629~641年)、II期(皇極天皇の飛鳥板蓋宮)、III A期(斉明と天智天皇の後飛鳥岡本宮) — B期(天武と持統天皇の飛鳥浄御原宮・672~694年)で、多くの建物跡が発掘されている。2022年11月調査では、宮殿の内郭規模が東西150m×南北200mと推定した。内郭は北区と南区に区画され、北区は平城宮の内裏の建物配置で、天皇が日常的に居住するプライベート空間である。南区は南門や大型建物・脇殿・庭で構成され、政務や儀礼の空間と推定されている。

< 盾形銅鏡と蛇行剣 — 奈良市と樫原考古学研究所 >

2022年12月、奈良市にある国内最大の円墳の富雄丸山古墳(4C後半・直径109m)の埋葬施設から、盾形の銅鏡(長さ64cm×幅31cm)と蛇行剣(全長237cm×幅6cm)が出土した。銅鏡には鼉龍(ダリュウ・鱧の一種)文と鋸歯文が施されている。鼉龍文は日本オリジナル。鋸歯文は盾によくデザインされる。蛇行剣は、鉄剣では古墳時代最大・最古である。さて、この被葬者は、何故、前方後円墳ではないのか。鉄剣と鏡は首長のレガリアだが、何故蛇行剣と盾形鏡なのか? 古墳は、奈良県北西部に位置し、河内・摂津を東西に結ぶ生駒山の暗クラガリ峠經由の暗越奈良街道と奈良西郡を南北に流れ、大和川と合流する富雄川が交差する南西側の要地にある。この豪族の正体は何者であろうか? 了